

隨泉寺寺報

2003 年 3 月号

第 391 号

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法座

講師 円超寺住職 法正 良映師

講題 「明るい人生」

かすみたつ はるのやまべは とほけれど
ふきくるかぜは はなのかぞする

古今和歌集

春霞といわれるように春は昔から少しかすんでいたようです。しかし近年は中国大陸から、黄砂が海を越えてやってくるようで、あまり嬉しい春の便りではありません。と同時に花粉が飛び散るので、花粉症の人にとっては厄介な季節かもしれません。花の香りは嬉しいけれども、いいにおいだけではないようです。

春の便りというと奈良の東大寺の〈お水取〉です。

奈良東大寺二月堂で3月13日午前2時から行われる修二会(しゅにえ)と呼ばれる十一面 悔過法要の中の一つで、この法会は、現在では3月1日より2週間にわたって行われていますが、もとは旧暦の2月1日から行われていましたので、二月に修する法会という意味をこめて「修二会」と呼ばれるようになりました。また二月堂の名もこのことに由来しています。

芭蕉も『水取りや氷の僧の沓の音』と詠んでいます。起源はそれよりはるかに古く、奈良時代(天平勝宝四年=752)から行われているという、最も古い宗教行事の一つです。この行事は「お松明」と共に古くから知られています。

『水取りや瀬背々のぬ るみも此日より』とあるように春を告げる風物詩で、これが来ると暖かくなるといわれています。

3月の法座予定

- 3月 2日午後6時より……………本部役員会
- 3月 14日昼席午後1時より……………春季彼岸会法座
- 3月 14日夜席午後7時半より……出張法座 中須賀集会所
- 3月 15日朝席午前10時より……春季彼岸会法座
- 3月 15日昼席午後 1時より……春季彼岸会法座



バスに酔うバスガイド

この間朝早くテレビを見ていたら、【おそく起きた朝は・・・】という番組でもしろいことを言っていました。【おそく起きた朝は・・・】という番組は 磯野貴理子・森尾真由美・松井直美の三人が視聴者からの葉書やメールを紹介し、それにコメントをするという番組です。もっばら、ぐちゃ悩みや相談事という内容です。それに無責任に面白おかしく、自分の意見を言うのです。今週の相談はバスガイドさんからでした。その悩みは『バスガイドだけれどもバスに酔う。バスの臭いを嗅いだだけでも気分が悪くなるし、バスに揺られると立っておられなくなる。このあいだも修学旅行で日光へ行ったけれども「これからいろは坂です。気分が悪くなった人は、遠慮はいらないので、早くガイドのところへ申し出て下さい」といったとたん自分が気分が悪くなりもどしそうになった。お客さんに反対に介抱してもらった。どうすればいいですか』というものです。バスガイドさんがバスに酔ったのでは話になりません。漫才師が笑われて悲しい気持ちになったようなものです。バスガイドさんはバスに乗るのが仕事、漫才師は笑いを提供するのが仕事です。三人が口々に『それはだめなんじゃあないの、致命的よ、適性が無い、それは仕事を変えたほうがいい』など



といたい放題。だけれども本人は[子供の頃からあこがれてどうしてもなりたかった]のです。そうですね、子供の頃、バスガイドさんにあこがれましたよね、制服もかっこいいし、物知りだし・・・。そしたら磯野貴理子さんが『ちょっと違うかもしれないけど、私が行く美容院に髪の薄い美容師さんがいて、その人はとても髪を大事に扱う。私は少し髪が多くて透いてもらうのだけれども、「髪が多くていいですね。」といわれると申し訳ないような気がする。この人は髪が少ない人には優しいんだろうなと思う。それは自分が一番良く知っているから。だから自分に弱みを持っている人は他人にも優しいと思う。バスのガイドさんがバスに弱かったら、バスに酔う人の事が一番よく判って優しくなれるような気がする

る。ひょっとするとバスガイドには一番適した人なのかもしれない。バスガイドが天職と思って頑張してほしい。』 同感です。他の人を気の毒だとか、かわいそうとか言うけれども、その人の苦しみ、悲しみはその人でないとわからない。

慈悲という言葉はインドの【マイトレア カルナー】という言葉を読したものです。マイトレアというのは 友情とか、慈しむとか、拠り所となるとか、 という意味です。カルナーという言葉は うめく、泣き叫ぶ、その身となつてともに泣く 仏様の慈悲は、その人と一つになり、お前の苦しみは我が苦しみ、お前の悲しみは我が悲しみとともに泣いてくださる。それを大慈悲という。

平成8年1月30日 最近食事は良く頂くのに、気分悪く、淋しい気持ちになりましたので、もしや病気になりまして意識不明で長患いし、見苦しい場合は、この世のためにもならず、国の損失、子供達の苦しみ、心配を絶対してもらってはいけませんので、この書面を見ていただき、注射一本であの世に行ける事が、私にとりまして、一番の幸せと存じますので、よろしくよろしくお願い申し上げます。

御五家族様のご一同様 誠に々々 有難く、よくよくしていただきましたこと、あの世からも、生ある時と同じ想いで、ご健康と事故無くお幸せであるよう祈りつつ、深く々々、御礼申し上げます。

最後苦しまず、見苦しい姿をみせず、早く清らかで
死なせてください
ませ。お願い致します。

向井チエノ



向井チエノさんは
高部の鈴木善恵さん
のお母さんです。

ご希望どうり延命治療をされず、倒れられてから4日目の1月27日85歳で
往生されました。

ひかりに会う

中国の諺に「冷たい飯と、冷たい茶はがまんができて、冷たいことばと、冷たい眼差しには耐えられない」というのがありますが、まことにその通りです。

いつの時代でも、人間のねがいは、安らぎとよろこびのもてる日を送りたいということに尽きます。いかにあかあかと電灯のついている家でも暗い家庭があり、ストーブの燃えている部屋にすわっていても、さむざむとした心を抱いている人もありましょう。かの有名なドイツの文豪ゲーテが、その死に臨んで「もっと光を！」と言ったということは、よく知られているところです。これは暗くなる人生の終りに光を望んだのか、単に部屋が暗いために、カーテンを引いて光を部屋の中に入れてほしいと言ったのか、その真相は

分かりません。ただ言い得ることは、彼が光を求めたことに間違いはないということです。それ故にこそ、この「もっと光を！」ということばが語り継がれているのでしょう。



人間は陰花植物と違って、暗くてじめじめしたなかでは生きることができません。光を求め、光を受ける人生、そこにこそ本当の安らぎとよろこびが持てるのです。佛は、欲

といかりと愚痴にさいなまれている私に、清浄光、歡喜光、智慧光を以て照らし育(はぐ)くみ救いとして下さるのです。ほんとうのあかるさとあたたかさに遇(あ)い得て、ほんとうの安らぎとよろこびが得られれば、光はすでに溢れているのであります。

お知らせ

5月8日～10日まで京都・奈良・大阪に研修旅行に行きます。

詳しくは募集要項を見てください。

御礼

門信徒会へ	金一封	別所	豊子殿	香典返しに返えて
	金一封	植木	茂殿	香典返しに返えて
	金一封	林	和江殿	香典返しに返えて
永代経懇志	壱拾萬円	別所	豊子殿	故別所 忠行様 特別永代経志として
	壱拾萬円	植木	茂殿	故植木 弘様 特別永代経志として
	五萬円	林	和江殿	故林 鉄夫様 特別永代経志として